

今年度主任を務めてきた私は今年度末をもって定年退職予定である。私の立教での31年間の内、文学部での活動期間25年の大半が比較文明学の活動に費やされたと言ってもよい。この専攻に関わることで私は多くのことを学ばせてもらった。私の最後の年度はそれを振り返り、総括する一年でもあった。比較文明学専攻に関わるすべての皆さんには心から感謝したい。その意味で、この場をお借りして、私の経験を振り返り、未来の比較文明学専攻、立教比較文明学会への督励とすることをお許し頂きたい。

私が立教に着任した1989年は日本の大学制度の地滑りの前兆が見えてきていた時代だった。私が最初に所属した一般教育部は、当時の「一般教育課程」を担当する教員組織で、英語から体育まで多岐にわたる分野の教員で構成されていた。そのため異分野間の交流可能性はあったものの学問文化の違いが交流を阻んだ。この経験は私が学際の意味を考えるきっかけとなった。91年にはいわゆる大学設置基準の大綱化が実施され一般教育課程を維持する法的根拠が撤廃された。それを機に全国の大学が一斉に崩れ始めるのだが、立教は多様性、学際性、教養を大切にする方針を打ち出し、新たに全学共通カリキュラム運営センター（全カリセンター）を設立して、全学的に教員が他学部学生の教育に当たる体制を整えた。

その中であって、文学部は特に学際性や教養に対する見識が高く、既に以前から一般教育とは別に文学部内に文学部共通科目群を設置し、学部内で教員が他学科学生の教育に当たる体制を整えていた。大綱化を機に文学部はそれをさらに推し進めて共通部分をより豊かにし、学際的学習機会を多く持つ教育システムを構想するようになった。それが「比較文芸・思想コース」である。95年に文学部教育学科に移籍した私は文学部研究センター委員としてコースカリキュラムの作成と運営の一端を担うことになった。コンセプトは思想・宗教・芸術の3本の縦軸と実作・実践という横軸の交差である。2年生後期から選抜された40名が学科を離れコースカリキュラム

を履修し、卒業論文あるいは卒業制作を必修として何らかの成果を作成して卒業するコースが出来上がった。専用科目も作られ、文学部教員は自学科学生の授業と専門からずれたコース学生の授業の2種類を受け持つことになった。これが本来の文学部が目指した「現代社会における人間学の再創造」の形だった。これは卒業制作をしたいという学生のニーズに応えるとともに、専門の蝸壺に入りがちな学問を市民に開き普遍化するための立教文学部教員の自己変革への決意を示す改革だった。

これと並行して、大学院教育の変革も計画された。それが我々の比較文明学専攻である。コース学生の卒業後の継続学修の道を拓き、再創造された人文学の新しい形を具現化するという意味もあり、文学部教授会での濃密な議論の末に、文学部のすべての学科の上に繋がる、特定の学科とのつながりを持たない新専攻として比較文明学専攻が構想された。これは比較文芸・思想コースと違い、文科省への設置申請を伴う事業だったので、その中心となった北山晴一教授とともに私もその設置準備室員に選ばれ、文科省へ何度か通うという経験をした。申請時の教員メンバーは、この二名の他、阿部珠理、小林憲二、田中望、鳥飼玖美子、森秀樹、横山紘一の各教授だった。これらの教員たちは北山、小林、森の三教授を除いて皆旧一般教育部所属だったり全学共通カリキュラム科目担当として立教に着任したりした人たちだった。もともと、比較文明学専攻は理学部を含めて全学に、全専門に開かれた大学院専攻だったのである。それゆえに、8名の専任教員枠の他に2名の特任教員枠が文学部の人事枠の外に大学当局の特段の配慮によって認められた。98年4月に入学定員が修士課程（当初、後に博士課程前期課程）20名で比較文明学専攻が発足。2年後に博士課程後期課程が5名の定員で設置を認可されて、現在の専攻の姿になった。98年2月に行われた第1回目の入試では、20名定員のところ100名を超える受験生があり、面接を2グループに分けて行ったが2日間にわたるといふ異例の事態になった。その結果、最初の合格者を33名出すことになり、教授会で大いに揉めることになった。その際の議論を引き受け、原案を通すために教授会の論戦で戦ったのが、新専攻初代専攻主任予定者でメンバー最年少のまだ助教授のこの私だった。比較文明学専攻の発足はそれほどセンセーショナルだった。人文学に物議を醸すための専攻

だったからである。

定員を大幅に上回る入学生を得て発足した専攻だったが、科目表の50科目は全部開講され、それぞれ多くの履修者があった。志願者も入学者もその大半は他大学出身者だった。入学者の中には東大、早稲田、慶応、上智などの出身者もいた。授業科目は8名の専任教員だけでなく、文学部全体の専攻という意味もあり、各学科教員の科目をダブルコードにして比較文明学専攻に開いてもらった。他学部教員の協力も得た。比較文明学専攻の特徴はその全体授業にある。「現代文明学特殊研究1」および「現代文明学特殊研究5」は所属する院生全員が出席すべき全体勉強会であり、専任教員8名が顔を揃えて、毎回シンポジウム、討論会などの形式で、縦横無尽に知の饗宴を張った。大きめの演習室でも椅子が足りず、他の部屋から持ち出して授業を行った。その成果物としての修士論文も多彩でレベルも高く、院生たちの幅広い関心と、方法論の多様性に教員も圧倒された。教員と院生が一体となって、対等の関係で論じ合い、学び合った。まさに知的梁山泊の様相であった。教員間の連携も盛んで、全体授業の後は院生とともに大学周辺の飲み屋に会場を移しその続きが行われた。教員個々の授業でも、本割の授業の他にサブゼミや課外授業を行う者も多く、院生たちとの関係は非常に密であった。

その後、次第に大学院を取り巻く環境が変わり、私大大学院は学生募集に苦しむようになって状況は大きく変わってしまった。「現代社会における人間学の再創造」を高らかに掲げた教員たちは去り、新しく着任した文学部教員たちは自分の研究に勤しんだ。そのようにして立教文学部も変質し、比較文明学専攻は文学部全体の上に立つ形式だけは維持するものの、現在では文学科文芸・思想専修の上に繋がる大学院専攻という運用になり、教員も文芸・思想専修教員が固定的に兼務することになって今日に至っている。しかし、比較文明学専攻がその名を留める限りそれは「文芸・思想専攻」ではない。設立教員が最後の生き残りだった私の退職をもって絶滅する今、本専攻はもう一度原点を確認し、何のための専攻だったのかしっかりコンセプトを再構築して、未来に臨んでいただきたい。

希望は今年も博士学位論文が2本提出されたことである。杉田理恵子さん「人間的生からみた助産——コンヴィヴィアルな出産のために」と丸山諒士君「モナド論の〈非神学的解釈〉——ライブニッ

ツの無限論を軸に」である。これで博士（比較文明学）を取得した修了生はおよそ20名に届くようになる。当初は本専攻の学位論文の新規性ゆえに審査で苦勞したものだった。今では文学研究科に馴染んでいるが、今後も既存の発想にとらわれない比較文明学らしい優れた冒険的研究が発表されることを心から期待するとともに、比較文明学専攻の輝かしい未来を祈念して、最後の筆を擱くこととしたい。

2020年1月

立教比較文明学会会長

立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻主任・教授

佐々木一也